

認知症を発症した知的障害者に有効な支援とは

ーライフストーリーワークの実践をととしてー

福島愛美¹

登坂庸平¹ 四方田武瑠¹ 倉澤正典¹ 高橋直¹ 堀川慶太¹ 村岡美幸² 古屋和彦²

【要旨】 A園では、利用者の高齢化にともない、認知症に罹患する利用者が増え、なかには、身体機能および意欲の低下がみられる利用者も確認されるようになってきた。そこで本研究では、認知症を発症した高齢知的障害者を対象にライフストーリーワークを実践し、意欲の向上が図られるかを検証することとした。方法は、認知症と診断されている当法人の利用者1名を対象に、アルバムを見ながら興味関心の高いできごとを整理し、その写真を集めた短編スライドショーを作成・視聴することとした。その結果、アルバム鑑賞、自分史アルバムの作成・視聴と、ワークを実践していく中で、支援員と楽しそうにコミュニケーションを取る姿が見受けられ、認知症を発症した高齢知的障害者であっても、ライフストーリーワークが有効に活用できる可能性が示唆された。

【キーワード】 重度高齢知的障害者 認知症 ライフストーリーワーク

I. 研究の背景と目的

1. 背景

独立行政法人国立重度知的障害総合施設のぞみの園（以下、当法人）の利用者の平均年齢は、2020（令和2）年4月現在で67.6歳（有期限利用者を除く）となっている。この10年で約8歳延びており、認知症に罹患する利用者も増えている。認知症に罹患した重度知的障害者のなかには、身体機能の低下や意欲の低下、具体的には、歩行を嫌がったり、以前は訪問者がくると自ら積極的に近寄り、会話を楽しんでいたが、そういった行動が見られなくなったりしている人もおり、意欲の向上に向けた支援の提供が喫緊の課題となっている。

2. 先行研究

ここで、高齢知的障害者及び認知症を発症した知的障害者の支援に係る先行研究を見てみたい。

高齢知的障害者の支援に関する先行研究をみると、青年期からの日中活動内容の変化やそのあり方¹⁾、高齢期の支援プログラムの開発²⁾、ライフストーリーワークの活用と効果の検証³⁾等が行われていた。

認知症を発症した高齢知的障害者に関する先行研究では、認知症の診断名別に見た行動の変化や支援に関する研究⁴⁾や、障害者支援施設における認知症の早期発見に向けた研究等⁵⁾が行われていた。

なかでも、当法人が、2016（平成28）年に実施したライフストーリーワークの活用と効果に関する研究は、対象者が活動時に喜ぶ様子が確認されただけでなく、活動後にも継続して微笑んだりしており、意欲の向上にも有効であることが推察された。しかしこれまで

¹ 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園生活支援部

² 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部

に、認知症を発症した重度知的障害者を対象にライフストーリーワークの効果の検証をした研究は見当たらない。

3. 目的

そこで本研究は、意欲の低下が見られる認知症を発症した重度知的障害者を対象に、ライフストーリーワークの有効性を検証することを目的とした。

なお、ライフストーリーワークとは、家庭の事情で児童養護施設や里親のもとで暮してきた子供が、文章や絵、写真、映像等の本人が理解出来るツールを使い、支援者とともに過去を整理し、未来へとつなぐ取り組みとして実施されているもので、本人自身が「自分とは」を知るだけでなく、対象者をより深く、正確に知るための引継ぎのツールとしても有効に活用され、認知症高齢者にも広く導入されているものである。

II. 研究の方法

1. 実施期間

実施期間は2019（平成30）年の6月から8月の3ヶ月とした。

2. 対象者の選定

対象者は、2019（平成30）年6月時点で認知症と診断されている当法人の利用者のうち、筆者の勤務する高齢者支援寮に所属し、且つ過去のライフストーリーワークの実践に参加していないA氏を対象とした。

3. 対象者の概要

- ・ A氏、90代、女性、障害支援区分6、認知症、老人性白内障（自力歩行時、物や人にぶつかることなく歩ける程度の視力あり）
- ・ 好きなこと/ お花を活かすこと、人の世話、おしゃべり、音楽鑑賞、人形を抱くこと
- ・ 苦手なこと/騒がしい環境

4. ライフストーリーワークの選定方法

ライフストーリーワークを行うにあたっては、「本人と一緒に活動・作業（ワーク）することが最も重要である。A氏と一緒に何をすると「わくわく」してくれるのか、A氏の好みや趣味、体力、気力等を総合的に考えながら検討した。A氏がアルバムをたくさん持っていたこと、アルバムを見せたら楽しむ様子が見られたこと・友達の話を楽しそうにしたことから、アルバムを見ながら本人の興味関心の高いできごとを整理し、その写真を集めた短編スライドショーを作成して一緒に視聴することにした。

5. ワークの手順

- Step1 支援員と一緒にアルバムを見て思い出を楽しむ。なお、1回の時間は、心身の負担にならないよう10分程度とした。
- Step2 良い反応が見られた写真を集め整理する。
- Step3 短編スライドショーを作成。

Step4 完成したスライドショーを一緒に楽しむ。

なお、調査の手続きについては、A園調査研究倫理審査委員会で承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. ワーク時の様子

《Step 1 支援員と一緒にアルバムを見て思い出を楽しむ》

- ・じっくりと写真を眺めていた。
- ・運動会の写真では「一番」と指を1本立ててうれしそうな表情を見せた。
- ・お花見の写真では「桜をみた」とはっきりと言っていた。
- ・お祭りの写真では「歌をうたった」とマイクを持つ仕草を見せた。
- ・機織りをしている写真をみて「作業」、「頑張った」、「お金稼いだ」などと発した。
- ・当時、一緒にの寮だった利用者の顔を指さして〇さんと笑顔で言った。



写真1 アルバムを鑑賞する様子

《Step 2 良い反応が見られた写真を集め整理する》

- ・運動会、海水浴、お花見、お祭り等の行事の写真に特に反応があった。

《Step 3 短編スライドショーを支援員が作成》

- ・本人が楽しめるよう、1分強のスライドショーを作成した。
- ・温かみを感じられるよう、音楽と挿絵を挿入した。

《Step 4 完成したスライドショーを一緒に楽しむ》

- ・静かな場所の方が会話を楽しめると考え、食堂にノート型パソコンを設置し、視聴した。

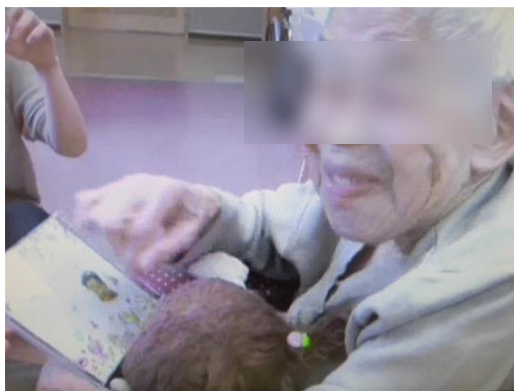


写真2 1回目の動画視聴前の様子



写真3 1回目の動画視聴時の様子

2. ワークの振り返り

振り返りの結果、視聴環境等を調整することの必要性が確認されたため、環境を調整し、再視聴することとした。具体的内容は、下記のとおりであった。

- ・スライドを 18 秒で切り替える設定にしたが、会話の途中で切り替わってしまうこともあった。
- ・静かな場所の方が、会話も聞こえやすいかと思い、食堂にノート型パソコンを設定して視聴したが、友達と別の場所で過ごすことに対し不安を感じたのか、集中して楽しめず、キョロキョロして誰かを探すような動きが頻繁に見られた。
- ・ノート型パソコンでは画面が小さく、見づらそうだった。

3. 再計画及びワーク（視聴）とその結果

振り返りの結果を踏まえ、食堂での視聴から、友達がいるデイルームにて視聴する形に変更し、ノート型パソコンから、画面の大きなテレビでの視聴に変更することとした。

また、動画の切り替え時間に関しては、適当な時間の検討がつかなかったため、再視聴の際にどれくらいの時間が望ましいか測定することとした。

再計画に基づき、実施した結果、写真に応じて支援員が話しかけると、嬉しそうに話をし、楽しむ様子が確認された（表 1）。



写真 4 2 回目の動画視聴時の様子

表 1 視聴前・中・後の本人の様子（1 回目・2 回目）

		視聴前		視聴中		視聴後	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
わくわくする 機会の提供	本人の表情	😊	😊	😐	😊	😐	😊
	言葉数	→	→	→	↑	→	↑
	本人の関心(集中状況)	↑	↑	→	↑	→	↑
	備考				※		

※具体的には、運動会の写真を見て「マラソン一番!」、物の写真を見て「(部屋の方を指さして) 部屋にしまっている」、友達の写真を見て「(地元) 帰った」「○○ちゃん! ここにいる!」など

IV. 考察

認知症を発症した重度の知的障害者 A 氏にライフストーリーワークを実践した結果、笑顔で何度となく支援員に話しかける様子がみられたり、「写真また見ようね」と支援員に言ってきたりするなど、生活の中に楽しみが増えた様子が確認された。楽しみを感じる機会の増加は意欲の向上にもつながることから、認知症を発症した重度知的障害者の意欲向上

にもライフストーリーワークが有効である可能性が示唆された。

また同時に、スライドショーと一緒に見ていた他利用者にも反応が見られた。具体的には、一緒に映像を楽しみ、一緒に思い出を振り返りながら会話を楽しんでいる様子が見られた。このことから、ライフストーリーワークは対象利用者だけではなく、周りの利用者にも良い影響を与える可能性があることが示唆された。

最後に、ライフストーリーワークの実践は、「何を」、「誰と」取り組むかだけではなく、「どのような環境で行うのか」も重要であり、1回目のワークがうまくいかなくとも、PDCAサイクルに則り必要な調整事項を検討し、環境や方法を何度も調整しながら、繰り返し取り組んで行くことが、支援の効果を出すうえでは欠かせないものである。今後も継続して取り組んでいき、より意欲の向上が図られるよう支援していくと共に、対象ケースを増やし、認知症を発症した重度知的障害者に対するライフストーリーワークの有効性等を検証していきたい。

文献

- 1) 伊藤省吾ほか：のぞみの園における日中活動の変化と傾向を探る．A園紀要，11：151-157（2018）
- 2) A園認知症ケアプロジェクトチーム：50歳からの支援 認知症になった知的障害者．A園（2012）
- 3) 大塚雅人ほか：その人が人生を理解する取組み，その人の人生を理解する取組み A園紀要，10：9-18（2017）
- 4) 四方田武瑠ほか：認知症の診断名別に見た知的障害者の行動の変化と支援に関する研究．A園紀要，11：165-170（2018）
- 5) 植田 章：知的障害者の高齢期の支援プログラム開発に関する研究．佛教大学社会福祉学部，社会福祉学部論集，14：37-50，（2018）